

〔東雅穀十三〕穀モミ略○中 民間の語に、穀をよびて菩薩。といふ事あり、此語はもとこれ韓地方言に出しなり、雞林類事に、かの方言白米を漢菩薩といひ、粟を田菩薩といふとするせり、又俗間に糠味噌といふもの、糠と鹽とを和して造れるを、名づけてサ、ヂンといふ、是は佛經を書寫するに、菩薩の字畫を省きて、ササとする事あり、さればササとは菩薩の義也、ヂンとは塵といふ字の音を以て呼ぶなり、これも米を菩薩といふ事に依れるなり、

〔倭訓栞前編二十八〕ばさち略○中 俗に粟穀を菩薩といへり、遠江天龍川の止にては専ら稱す、

〔玉勝間十四〕米粒を佛法ばさつなどいひならへる事

穀物をおろそかにすまじきよしをいふ時に、米粒などを佛法といひ、東國にては菩薩といふ、これ大切にして、おろそかにすまじきよしなれば、然いふ心はいとありがたけれども、佛菩薩より尊き物はなしと心得たる心よりしかいふなれば、言はいとひがごととなり、神とこそいふべけれども、まことに穀はうへもなきものなれば、神とも神と申すべきものなり、

〔鹽尻七十一〕天竺呼米粒爲舍利、佛舍利亦似米粒、是故曰舍利、秘藏記 舍利者稻穀也、馱都者佛體也、

慈恩上
生經疏

〔倭名類聚抄十七〕米略○中 說文曰、粒音立、伊奈豆比、米甲也、

〔箋注倭名類聚抄九〕稻穀具、今俗呼古米都夫、按都此都夫一聲之轉、圓訓都夫良同語、

〔類聚名義抄七〕粒音立、イナツ、米音立、イナツ、俗、粒音立、イナツ、

〔伊呂波字類抄伊食〕粒イナツ、

〔日本靈異記上〕序、諾樂藥師寺沙門景戒、熟瞰世人也、略○中 欲他分惜己物、甚流頭於粉粟粒、以啖糠、略○中

粒ビツ

〔下學集下木〕粒ビツ